

地域医療の魅力を
発見し、
伝えていくために、
私たちができること

2022年12月3日

亀田総合病院
リウマチ膠原病アレルギー内科
山本 恭資



開示すべきCOI関係にある企業はありません。

三重大学時代

✓MUSH；看護補助業務

「たらい回しをなくす」

➤「何でも屋」



医学生が看護お手伝い

津市の三重大病院救命救急センターで、医学生らが看護師の仕事を手伝い、活躍している。多忙な看護師の負担を少しでも減らそうと昨年六月から、救急搬送の増える夕方以降に活動。「医師の卵」たちが自主的に救命医療の最前線に立つ珍しい取り組みは、現場の士気を高める効果をもたらしている。

三月下旬のある夜。三重大病院救命救急センターの集中治療室（ICU）には、急病や交通事故で搬送され、治療を受けた患者がベッドに横たわっていた。

ICUでは、看護師二十五人が交代で二十

医の心 現場で磨く

とんどは意識がなく、活動に取り組む学生付きっきりのケアが必グループMUSH（ムないか）。同級生や先輩医師と話し合い、行先を防ぐため二時間おきに患者の体位を変えたり、おむつ交換を手伝ったり、おむつ交換を手伝ったりした。採取した血液を検査室に運び、ごみを捨てるなど、午後五時から十一時まで休むことなく働いた。

活動に取り組む学生自分たちでも何かでき「医師免許を持たない」搬送の要請を断る現実を目の当たりにした。「医師免許を持たない」

「看護師の仕事が理解でき、チーム医療の大切さを実感した」と話す。

学生らの懸命な姿勢が看護師らに好評で「初心に戻った」との声も。今井寛センター長は「看護師が患者一人一人と向き合う時間が増えた。学生も、救命救急の最前線で学ぶことは多い」と評価する。

ムッシュ代表の山本さんは「看護師不足の病院は多い。医学生が少しでも手助けできるシステムをつくり、救急患者の受け入れに努めていけたら」と話

患者の体位交換の方法を先輩に教える山本恭寛さん（左）津市の三重大病院救命救急センター集中治療室で

三重大病院「チームの大切さ実感」

山本春香さん（右）は

沖縄→離島→専門家→地域

✓沖縄県立中部病院 島医者養成プログラム

✓沖縄県立北部病院 内科

✓南大東診療所 総合診療医

✓亀田総合病院

リウマチ膠原病アレルギー内科

✓今後は三重へ



南大東島



- ✓ 人口1,300人
- ✓ 周囲400kmに渡って陸地のない絶海の孤島
- ✓ 産業：サトウキビ、漁業

唯一の診療所



通常診療

外来診療、訪問診療、妊婦健診、予防接種、学生や研修医教育、**休日夜間オンコール、空輸、災害や異状死の対応**

診療外

地域ケア会議、学校医、産業医、市民公開講座
消防団との勉強会



南大東島での魅力 — 責任感 —

✓ 「自分のレベルが、
その島の医療レベル」

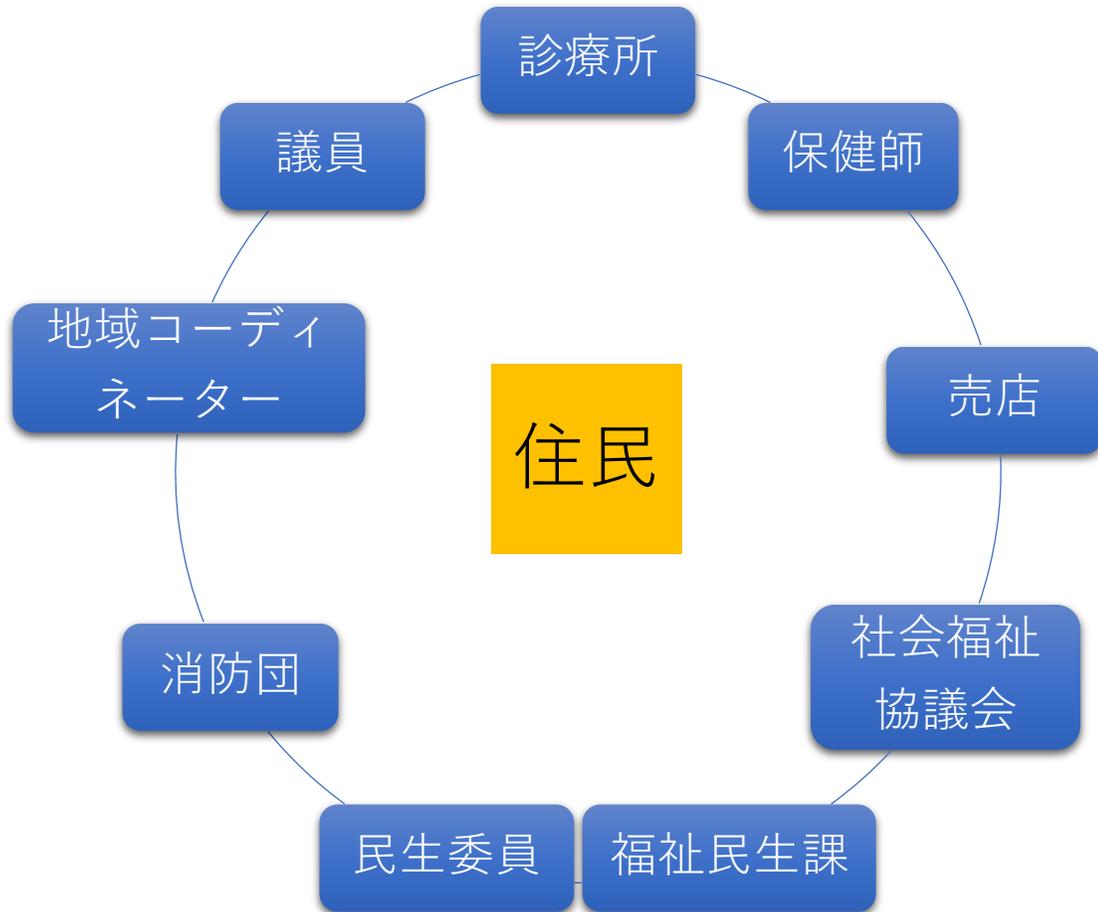
✓ 全部自分にかえってくる

唯一の医師として島民からの信頼、感謝

= やりがい



多職種での関わり



患者との関係を
適度に保つ？



✓ 共感と burnout

✓ 1人の地域住民として

離島から膠原病へ また地域へ

- ✓ 「たらい回しをなくす」 「何でも屋」 「離島医療」 「膠原病」
- ✓ 「県外で研修して学んだものを持って帰ってこい」
- ✓ 恩師や先輩との連絡
- ✓ 三重で地域医療をしよう

地域の魅力を感じる

- ✓学生や研修医、若手医師に対する窓口を作る
- ✓卒前からの繋がり
- ✓地域の環境整備

fin

